

## 巻頭によせて

校長 北村 聡  
Satoshi Kitamura



1871年のプロイセン・フランス戦争（普仏戦争）以来1914年に第一次世界大戦が始まるまで、ヨーロッパは平和でした。第一次世界大戦が始まったとき、過去の戦争の記憶は遠ざかっており、人々は戦争の実態、残酷な殺し合いの実態を想起して、戦争を回避するという選択が出来ませんでした。戦争は半年ほどで終わると楽観視され、戦場に赴く若者達は、「まるでフットボールの試合」に出かけるような気持ちで意気揚々と出かけてゆきました。しかしそこで見たものは、仲間が敵の機関銃と大砲によって次々になぎ倒される地獄の世界でした。戦争は長期化し、戦争は最早戦場で兵士達が戦い、騎兵の突撃によって一気に勝敗を決するものではなくっており、一般国民生活にも大きな影響を及ぼす「総力戦」の時代になっていました。900万人以上が戦死、銃後の国民も攻撃にさらされ、貧困と殺戮に苦しみました。

先日、イラク戦争中の秘密映像をテレビで放映していました。現代の戦争はもっと悲惨です。武装ヘリコプターが1キロも離れた所から攻撃して、子女も含む何の罪もない人々が簡単に殺戮されてゆきます。

幸い日本は1945年に戦争が終わって以来、戦争に巻き込まれることなく、平和な時代を経てきました。しかし一方では第一次大戦前夜のように戦争の記憶は薄れ、その残酷さと悲惨さ故に、何が何でも戦争は回避するべきであるという覚悟のようなものが弱ってゆくような危険を感じます。無論、突然外国の軍隊が日本に攻めてくるようなことがあれば、断固としてこれを撃退せねばなりません。

ただ、なかなか景気が良くなり、政治の混乱の内に閉塞感が募り、戦争という手段によって突破口を見いだそうとするような短絡的世論が興ることを危惧しています。

平和であることのありがたさを感じながら、何事にも感謝の気持ちをもって日々過ごすことが出来ればと思う今日この頃です。